

高知県の渇水・利水に関する防災風土資源

整理番号	高渇 1	扇の要であった山田堰跡					
------	------	-------------	--	--	--	--	--

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水			
------	-------	-------	------	-------	--	--	--

場所	高知県香美市土佐山田町山田島						
----	----------------	--	--	--	--	--	--

見所・アクセス	土佐山田町の物部川には、高知県最大穀倉地帯の香長平野を潤してきた山田堰がありました。現在、山田堰史跡として高水敷に一部保存されています。国道 195 号の物部川架かる香我美橋の手前の道路を約 500m 進むと物部川の堤防に出ます。そこから山田堰史跡には歩いて行けます。						
---------	--	--	--	--	--	--	--

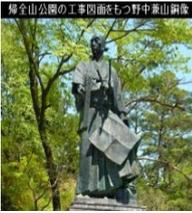
写真・図	    				
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5
写真・図	   				
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	

解説文	<p>四国の川との関わりで、とりわけ大きい功績を残したのは、野中兼山です。兼山は、元和元年(1615)姫路で生まれ、4歳で土佐に移り、土佐藩家老野中家を継いだ。17歳で奉行職について以来30年以上の間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走しました。特に、物部川での新田開発は、土佐の発展に大きく寄与しています。</p> <p>物部川は河床が低く、流域には、写真1のように灌漑の難しい河岸段丘が広がっています。兼山はこうした荒れ地を灌漑するために、物部川の扇状地が広がる扇の要の場所に大規模な堰を築いて、縦横に用水路を建設しました。</p> <p>25年の歳月をかけて長さ327m、幅11m、高さ1.5mの山田堰を建設し、同時に右岸側に上井(かみゆ)、中井(なかゆ)、下井(しもゆ)(写真2)、左岸側に父養寺井(ぶようじゆ)の用水(写真3)を導き、1700町歩もの広大な新田を開発しました。これが、現在、高知県最大の穀倉地帯になって香長平野(写真4)を潤してきましたが、昭和48年、上流に合同堰が完成してお役御免となり、現在は史跡(写真5)として一部が高水敷に写真6のように保存されています。写真7は、山田堰堀川三百年史の付図にある明治後期における山田堰の改修平面図です。</p> <p>また下井(しもゆ)は、舟入川となって、写真8のように高知の国分川まで流れ、江戸時代の重要な舟運としての役割を果たしました。野中兼山は、現在でも土佐を作った男として有名で、その銅像が、大豊町本山の婦全山公園に写真9のように建立されています。</p>						
-----	---	--	--	--	--	--	--

得られる教訓	野中兼山という先人の努力により、造られた山田堰により、物部川の下流域(現在の香長平野)が発展したことを教えています。						
--------	--	--	--	--	--	--	--

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
------	------	----	------	-------	----	----	----	-----	-----

時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降
----	--------	------	-------	----------	----------	------

整理番号	高渴2	現役の八田堰							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場所	高知県吾川郡いの町八田								
見所・アクセス	いの町八田には八田堰があります。この堰は、土佐藩の家老、野中兼山によって、慶安元年（1648）に造られた歴史が古い堰です。 八田堰は、仁淀川の河口から9kmほど遡った場所、県道36号の堤防から見えます。								
写真・図	 <p>写真1</p>	 <p>写真2</p>	 <p>写真3</p>	 <p>写真4</p>	 <p>写真5</p>				
解説文	<p>仁淀川の河口から9kmほど遡った場所に八田堰（はたぜき）（写真1）があります。</p> <p>仁淀川の流れを遮る最初の構造物となっています。この堰は、土佐を作った男、土佐藩の家老、野中兼山（1615～1664）によって、慶安元年（1648）に造られた歴史が古い堰です。</p> <p>兼山は17歳で奉行職について以来30年以上の間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走しました。特に、物部川や仁淀川での新田開発は、土佐の発展に大きく寄与しています。</p> <p>兼山は仁淀川でも堰（八田堰（写真2）、鎌田堰（写真3））を築き流域一帯に新田を開発しました。最大の堰は延長415m、幅25mの八田堰で、5年がかりの難工事で完成させました。ここで堰止められた水は、左岸の「弘岡用水」に落とされ、弘岡平野の荒廃した1253町歩を水田化し潤し、今では施設園芸が盛んな高知市春野町一帯の農業基盤を形成しています。</p> <p>この用水路（写真4）は伊野と春野の町境に立ちふさがる行当（ゆきとう）の崖を削って造られ、新川の集落を抜けると、元春野町役場、唐音の切抜の水門、第34番札所種間寺の横を流れ、高知市に入ると第33番札所雪隠寺のそばを通過して浦戸湾に注いでいます。水路は川舟の往来にも使われ、”運河”の役割も果たしていました。古い町並みが残る新川の集落は、物資の集散地として大きくなったと言われていました。兼山は重労働の治水工事に、長宗我部の遺臣たちを起用しました。藩の兵農分離策で農民になっていた彼らは郷土にとりたてられると不満をやわらげ、先頭にたって新田開発に活躍しました。</p> <p>このあたりに兼山の手腕が光りますが、あまりに厳しい施策に非難の声が高まり、寛文3年（1663）権力の座を追われ失職、3か月後に急死する不遇の生涯を終えました。遺族も40年も幽閉される悲劇を生んでいます。兼山の銅像（写真5）は、所領していた大豊町本山の婦全山公園に工事図面を手にして立っています。</p> <p>現在、八田堰はコンクリートにより近代的に改修されていますが、元々の兼山遺構の八田堰は湾曲斜め堰で、施工にあたっては流水との調和を図るため川に綱を張り、流水による綱のたわみぐあいを調べて堰の方向や形状を決めたといわれています。</p>								
得られる教訓	八田堰や用水路は今も立派に機能して、現在の高知県発展の礎となったことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	高渴3	「念仏堰」								
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水						
場所	高知県幡多郡黒潮町加持									
見所・アクセス	高知県黒潮町加持川には、大渇水でも不思議に堰の水が涸れることがなかったと言われる堰がありました。念仏堰と呼ばれている堰で土佐くろしお鉄道士佐入野駅より北へ直線距離約2kmの県道336号線沿いの三嶋神社の前の加持川にあります。									
写真・図	<p>2007年10月24日撮影</p>				<p>四国クリエイト協会提供(平成24年12月5日撮影)に上書き</p>			写真1	写真2	写真3
解説文	<p>高知県黒潮町加持川には、大早魘でも不思議に堰の水が涸れることがなかったと言われる堰がありました。念仏堰と呼ばれている堰(写真2)で土佐くろしお鉄道士佐入野駅より北へ直線距離約2kmの三嶋神社の前の加持川の写真1にあります。</p> <p>その名前の由来に関して、四国防災八十八話では、「昔、高知県黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。村の人々は堰が決壊するのは崇りのため、人柱を立てて祈禱することにより堰が守られると考えました。・・・(中略)・・・</p> <p>村人が、昨夜見た夢の中で、神様から遠からずこの辺りを、縦摘の着物を着て、それに横縞の継ぎを当てた人が通る。その者に人柱として立つことを頼むが良い」とのお告げがあったことから、村人は、横縞の継ぎあてをしていた遍路さんの足を止め、事のいきさつを話し、人柱になっていただくことを祈る気持ちで懇願しました。遍路さんは天に向かって祈り始め、しばらく祈ってから急に口を開き、「私は天涯孤独です。この世に生きるだけ生きて来ましたが、もう残りわずかですから、大勢の皆さんのお役に立てることがありましたら、喜んでお引き受けしましょう」と言いました。村人はよろこび、その遍路さんを迎え入れ、丁重におもてなしをするとともに、その夜は涙ながらに別れを惜しんで夜を明かしました。</p> <p>翌日、村人は堰のそばに大きな穴を掘り、遍路さんを入れました。穴からは節を抜いた大きな竹の筒が地上に出ていましたので、竹筒の底からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と誦経が聞こえ、それに唱和して地上でも「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と竹筒の音が聞こえなくなるまで、三日三晩祈り続けました。こうして堰はできあがり、人柱の霊力により怨霊の怒りは鎮まり、大洪水でも絶対に堰が切れることがなく、大早魘でも不思議に堰の水が涸れることがなくなりました。それ以来誰言うとなく、念仏堰と呼ぶようになりました。」と紹介しています。</p> <p>現在の航空写真(写真3)に大早魘でも不思議に堰の水が涸れることがなくなった念仏堰の場所を示します。写真3のように念仏堰のある加持川は、下流で吹上川に合流し太平洋に流れる川です。</p>									
得られる教訓	珍しい名前の念仏堰、歴史的な施設の由来を学ぶということを教えています。									
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト	
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降				

整理番号	高渇 4	吉野川最初の分水・甫喜峰疎水記念碑							
災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場所	高知県香美市土佐山田町須江								
見所・アクセス	新改川は、高速道路の南国インターから県道 31 号の前田植野線を南国市立久礼田小学校に向かって東に約 2km 進んだ場所に流れています。その新改川に架かる「かみかいだばし」を渡り、約 200m 行った道路の左側に甫喜峰疎水（ほきがみねそすい）記念碑（写真 1、2）が建立されています。								
写真・図									
解説文	<p>四国 4 県にまたがる吉野川流域(写真 3)の集水面積は 3,750km² あり、四国の約 20%に相当します。流域の降水量は太平洋側の高知県の上流山地部で年間平均降水量が 3000 ミリを越す地域を抱える一方、瀬戸内海側に位置する香川県と愛媛県は、降雨量が少なく、古来より水資源の確保には苦勞した地域となっています。この深刻な水不足を抜本的に解決するため、藩政時代の末期から豊富な水量をもつ吉野川の水に期待して、銅山川疏水（安政 2（1855）年）などの幾多の分水構想が描かれてきました。吉野川の利水の歴史はいわば分水の歴史であります。</p> <p>吉野川の豊富な水量を多目的に、より一層高度に活用しようとして、先覚者たちは地形条件を巧みに利用し、良好なダムサイトを設定することにより、流域変更による落差を利用した発電所を建設してきました。現在は、早明浦ダム(写真 4)を中核とした吉野川総合開発の実施により、吉野川の水は四国 4 県で利用され、その発展に大いに寄与しています。しかし、そこには先人たちの苦勞があったことを忘れてはなりません。特に分水問題は、利害相反が明確になり関係者の調整が非常に困難です。ここでは、吉野川水系のダム・堰・用水・分水図（写真 5）に示す甫喜峰疎水（ほきがみねそすい）（穴内川分水）について紹介します。</p> <p>吉野川の分水が最初に実現したのは、かんがい用水として吉野川支川穴内川（あなないがわ）から高知県の新改川への導水した甫喜峰疎水（穴内川分水）（写真 6）でした。明治 26 年及び明治 27 年に発生した土佐かんがい史上空前の大干ばつに際して、香長平野（高知平野の東部）は一望枯渇し収穫皆無の状態に陥ります。「明治 27 年の旱害になった際、新改川下流の植田・久次地区が上流に分水を要請したところ上流側が拒否したため、上下流で乱闘になりました。こんなことを続けてはいけないと甫喜峰疎水の必要性が再び痛感されるようになり、新改村や久礼田村の村長などが協力して、高知県に嘆願した」（土佐山田町史）とあるように、新改川(写真 7)沿いの村で地元農民たちの水争いがあったことや吉野川からの分水の計画を要請したことがわかります。その結果、国分川の他に水源を求め、野中兼山（のなかけんざん）（写真 8）が計画した穴内川から分水する工事の期成運動を推進し、関係各所の協力を得て明治 29 年に疎水工事に着工しました。工事は、現在の香美市土佐山田町繁藤において、穴内川を堰き止めて、甫喜ヶ峰の中腹に延長 988m のトンネルを掘り流域変更し分水するものでした。この甫喜峰疎水（穴内川分水）は明治 33 年に竣工(写真 9)し、その 10 年後の明治 42 年には疎水の落差を利用して吉野川水系で最初の水力発電を行いました。現在も吉野川から分水された水が豊かに流れる新改川の様子(写真 10)は、先覚者の水源整備の歴史を現在も物語っています。</p>								
得られる教訓	皆さんが暮らしている南国市久礼田や香美市土佐山田は、かつて水不足で悩まされました。しかし明治時代の吉野川からの甫喜峰疎水（ほきがみねそすい）（穴内川分水）により、水不足が解消され、今日の南国市、香美市の発展の礎となりました。このような吉野川の流域外分水の歴史は、先人の労苦によって成り立っていることを教えてください。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			